

坑井位置	坑井深度 m	水量 m ³ /d	ガス量 m ³ /d	水温及び 自噴状況 (f...自噴) C°	pH	HCO ₃	CO ₂	全炭酸溶存 CO ₂ CH ₄ として 目盛 %	Cl ⁻ mg/L	備考	
						mg/L	mg/L	mg/L			
18-R	6	n. f	0	10.7	6.8	180	28.6	159	0.3	148.2	
19-S	3.3	n. f	0	12.2	6.4	110.5	6.6	86	0.4	62.0	
20-S	浅井戸	n. f	0	10.3	6.4	98.8	14.3	86	0.4	34.2	
20-Q	浅井戸	n. f	0	11.6	6.6	124	27.5	117	0.5	75	
19-Q	4	n. f	0	9.6	6.4	755	7.7	62	0.2	49.3	
18-P	浅井戸	n. f	0	9.7	6.9	151	24.2	133	0	15.8	
20-O	3.6	n. f	0	1.16	6.6	75.5	5.5	60	0	57.8	
19-O	≒ 3	n. f	0	9.5	6.4	69.7	15.4	66	0.1	19.0	
17-M-1	深井戸	n. f	0	11.0	7.7	151	5.5	114	0.2	34.2	
15-N	浅井戸	n. f	0	11.6	6.1	40.7	19.8	49	0	15.8	
14-M	深井戸	n. f	0	16.0	7.5	29	3.3	24	0	10.4	
13-M	浅井戸	n. f	0	10.3	6.6	145	6.6	111	0	49.3	
13-O	≒ 2	n. f	0	9.8	6.4	124	19.5	106	0	46.0	
12-P	6.6	n. f	0	12.7	6.2	34.8	11	36	0	21.4	
15-P	41.5	2	0.05	16.3...f	7.6	87	4.4	67	4.1	220.0	
16-O-2	4.3	n. f	0	7.4	6.2	47	7.7	42	0.5	43.0	
19-L	2.7	n. f	0	10.0	6.0	29	6.1	27	0	46.0	
17-O	3.6	n. f	0	11.7	7.0	122	5.5	94	0	70.0	
17-M-2	36	n. f	目測 0.06~ 0.07	17.2	7.6	221	(5.5)	(165)	4.9	110.0	

553.94 : 550.8 (524) : 622.19

石狩炭田空知地区西部芦別区高根川流域地質調査の概報

三 田 正 一* 小 島 光 夫**

Résumé

Preliminary Notes on the Geology along
the River Takane, Western Ashibetsu
Area, Sorachi District, Ishikari
Coal Field.

by

Masakazu Mita & Teruo Kojima

(1) The area surveyed occupies about 12 km² along the River Takane, one of the southern tributaries of the river Sorachi.

(2) The area is a hilly land, several hundred meters high above sea level, exhibiting some rather mature topography, and also making it self the eastern skirt of the Bibai mountain range. Geologically, the latter consists of a vast and complicated anti-

clinal uplift of the Mesozoic formations, which make the back bones of the Ishikari coal field. The eastern wing of the anticline shows almost N-S directional arrangements of Palaeogene formations (the Ishikari series). The upper parts of the Ishikari series or formations corresponding to Woodwardia S. S~Ashibetsu coal bearing formation are inclined steeply eastwards with angles of 80°-40° in the area. They often show terrace structures, and also are sloping gradually to the east.

(3) The writers can correlate Takane C. B. F. (coal bearing formation) to the so-called Woodwardia S. S formation, because of a lithic resemblance, stratigraphic sequences, and even presence of Woodwardia sp.. The formation is considered extraordinarily well developed in this area and contains several workable coal seams. The thickness of each

* 燃料部副部長 ** 燃料部
地質月報第1巻 第5號

seam is almost 1-2 m (rarely over 5 m). At present the Takane colliery is mining some of these coal seams and is getting outputs of almost 3000 t/month in 1947. Kumanosawa C. B. F. covers conformably Takane C. B. F. and is divided into two parts; it has seven workable coal seams in the whole and each thickness of the seams reaches rarely 4.5 m, but generally it is about 1.5 m. These coal seams are more stable in their sequence than those of Takane C. B. F. Intervals between each coal seam, however, are rather wide (85 m in the mean) and the coal seams almost entirely unexploited.

(4) Coals of the both coal bearing formations belong to low grade bituminous coal in most cases and also mainly to banded coal which has bright and dark parts. Its calorific value shows 6,600 cal. at 15% ash contents, and its use at present is for industrial and domestic fuel.

(5) The writers have done rough estimation of coal reserve both in the whole area and the claims (mining concession area) of the Takane colliery, including its loaned area within the claims of the Yubetsu Coal Mining & Railway Company, as follows.

C. B. F. District	Takane C. B. F.	Kumanosawa C. B. F.	Total
Whole area	1578	1384	2962
Claims	526	93	619

Unit: ten thousand metric ton

Vertical limit in depth: -500 m under the level of adits.

(6) Coal reserves calculation for Ashibetsu C. B. F. has not undertaken because of the insufficiency of the data obtained. However, Ashibetsu C. B. F. has two coal bearing zones. It develops well along the lower part of the river Takane, or the eastern margin of the areas. In this part the lower coal bearing zone seems to be most promising in quantity of coal, but its complicated structure which is characterized by minor reverse and normal faults has handicapped its practical explorations.

要 旨

(1) 本調査は昭和22年本所炭田調査会によつて施行された。調査区域は空知郡芦別町及び赤平町に属し、空知川の南側に於て支流高根川の流域約12 km²の範囲を占める。

(2) 調査区域は美唄山脈の東裾部に当る丘陵地帯で、石狩炭田の脊梁部と考えられる中生代層複背斜構造の東翼部として累重する古第三紀石狩統の上半部、即ち所謂羊歯砂岩層乃至芦別夾炭層に相当すると考えられる高根夾炭層、熊の沢夾炭層、上部幌介層及び芦別夾炭層が東方へ40°~80°傾斜の階段状単斜構造(局部的に小褶曲を伴う)を形成するが、一般に東方程緩傾斜を示している。

(3) 高根夾炭層は可採炭層数層を挟有、高根川中流部に於ては6番層の如く炭丈+5 mに達する厚層の部分もあるが、南北方向に縮減し一般に1~2 mのものが多く、現在高根炭鉱が高根川流域を利して2, 3, 4, 6及び7番層等を採掘し、月産三千数百t(昭和23年)の出炭を挙げている。熊の沢夾炭層は可採炭層7層を挟有し、各炭層の厚さは1.5 m程度を示し、時に4.5 mに達する場合もあるが、炭層の連続性になお不明の点あり、又炭層間隔も大きく集約的でない。

(4) 本区域の炭層は大部分低度瀝青炭に属する縞状炭で発熱量6600 Cal(灰分15%の場合)、一般工業用及び家庭用燃料炭として利用されている。

(5) 高根及び熊の沢両夾炭層の可採炭層に就いて高根炭鉱区内(借用地を含む)及び調査同域に対し地並以下500 m迄の炭量を概算すると次の通りである。(単位10,000 t)

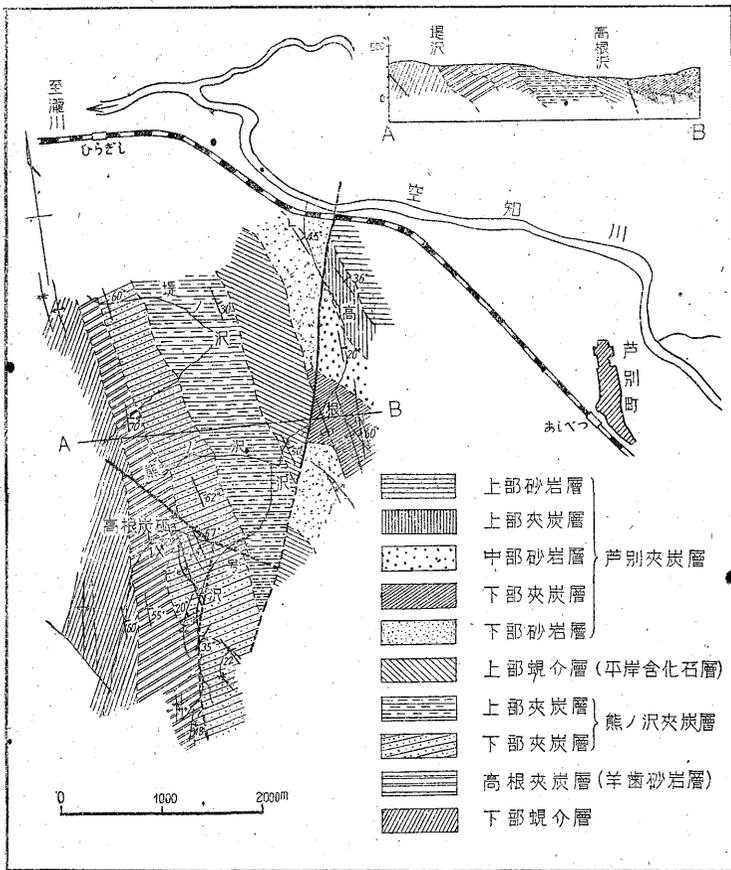
区域	夾炭層		合計
	高根夾炭層	熊の沢夾炭層	
鉱区内	526	93	619
同区域	1,578	1,384	2,962

但し芦別夾炭層に就いては資料不足のため、計算を行わないが、本夾炭層は上下2部の夾炭層より成り調査区域の東縁部、即ち高根川下流流域に好露出を示し東方へ広範囲に亘り発達している。本地域では下部夾炭層が有望と思われるが、多数の正逆断層により切断されているから、大規模採炭には適さない様である。

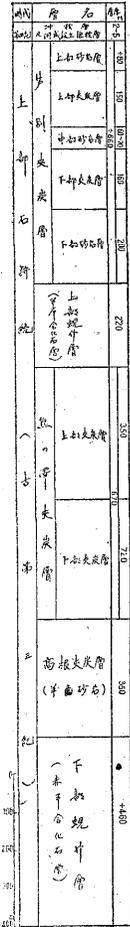
1. 緒 言

調査地域は北海道空知郡芦別、赤平両町に跨り空知川南支流高根川に至る間の流域約12 km²の面積を占める。

昭和22年8月~10月調査区域の南半を占める高根炭鉱採行区域の地質調査に重点を置き、更に翌年8月~10



第2圖 空知炭田高根地區地質圖



第3圖 高根地區地質柱狀圖

月芦別町及びその近傍の概査を行つた際には、調査区域の北東部の再調査を行う機会を得た。本文はこれら再度調査の総合結果を中間的に報告するものである。調査に際しては縮尺5千分の1地形測量を実施し、当時嘱託立花栄一が担当、なお高根炭礦の採鉱上の現況調査は同嘱託沢田福三が行つた。

2. 地質 (第2図参照)

a) 概説 石狩炭田の中央脊梁部を成す美唄山脈は、中生代層の複雑した背斜構造より成るが、古第三紀石狩統はこれを圍繞する比高數百mの丘陵地帯を形成し、大背斜構造の翼部を成している。調査地域ではこの東翼部の上半部即ち所謂下部幌介層より芦別夾炭層に至る各層が漸して北微西方向の帯狀分布と一般傾斜40~80°東を示すが、地域の東方空知川に略々沿うて北西方向の大向斜軸(所謂空知向斜)が認められる。

b) 地質構造 調査地域の西縁に於いて下部幌介層(二赤平含化石層)が略々南北性の背斜構造を示す他、各

地層は概して東に40°~80°傾斜している。局部的には小規模な褶曲が発達しているが、軸方向延長先で階段狀單斜構造に移り変つている。小褶曲は何れも北微西方向を示し、褶曲に伴う幾多の小逆断層も南北性であつて、一般に東側が西側に衝き上げられた傾向を示すものである。調査区域内の断層の大部分は空知向斜その他小褶曲構造生成後の張力性斜交正断層で、調査区域中央部にある北西性の高根断層と、区域の東縁部を略々南北に走る歌村断層が著しい。高根断層は歌村断層以西の調査区域を更に南北两部分に別ける。即ち北部地区は走向一般に北微西で傾斜50~80°東を示す。南部地区では多くの北微西~北西性断層及び褶曲が発達している。

c) 夾炭層 (第3図参照)

〔高根夾炭層〕 本層は高根川中流附近及び熊の沢上流部に於いて最も発達し、層厚350mにも達する部分があるが、南北走向延長方向には漸次薄くなると同時に、挟有する炭層も非薄化する事が認められるので、本層の

層厚は平均 310 m と見てよい。一般に外観は帯緑淡褐色乃至チョコレート色の頁岩を主とし、帯黄灰色中粒砂岩を互層状に混え、泥灰岩の薄層を挟む。

本層は最下位所謂下部覬介層より漸移するもので羊歯砂岩帯に該当するものと考えられるが特に稼行炭層を挟有するに至つた本地域の岩層に対し高根夾炭層と命名した。なお高根夾炭層と上位熊の沢夾炭層との関係も整合である。

〔熊の沢夾炭層〕 本層は岩質及び炭層層準上、上下の二層に分つ事が出来る。

(イ) 下部夾炭層 層厚約 320 m で主として帯青灰色中—粗粒砂岩と帯緑淡褐色頁岩との互層である。下底に近く 2~3 層の炭層を挟み、その 1 層は平均山丈 4.2 m で走向延長が安定しているのが良好な標準層となる。又本層の下部 70~80 m の層準の頁岩層中に小型 *Corbicula* sp が散在するのを認めたが個体数も少く保存も良好でないので走向方向に追跡したが遂に延長先を確める事が出来なかつた。この産状は下部覬介層における *Corbicula* のそれとは全く異つている。

(ロ) 上部夾炭層 本層は下部夾炭層の上に整合に重なり、厚さ約 350 m あり、帯青灰色の細—中粒縞状砂岩と帯緑褐色頁岩との互層よりなり、上部に頁岩及び泥灰岩の薄層を多く挟む。

熊の沢夾炭層と命名した理由は本層の最下底 8, 9 番層は嘗て熊の沢中流部で部分的に採炭された事があり且つ熊の沢に最も良く連続露出しているからである。

熊の沢夾炭層と上部覬介層とは漸移的で岩質も海水性の堆積相で甚だ酷似している。前者の上端面に近く *Viviparus* sp. を産する化石帯があるがこの層準の更に上位 30 m から細粒板状砂岩となり *Corbicula* sp を散点するのでこの部分から上部を人為的に上部覬介層とした。

〔芦別夾炭層〕 本層は主要夾炭層として上下部の二夾

炭層と、これらを挟み或は隔てる 3 砂岩層とによつて構成される厚さ 660 m 以上の累層である。本区域では上部夾炭層より下部夾炭層の方が有望である。

(イ) 下部夾炭層 本層は層厚約 160 m で帯褐暗灰色頁岩を主とし(細—中粒泥灰質)砂岩を従とする互層よりなり、炭丈 0.4~+1.0 m の稼行可能な石炭 4 層を挟有する。嘗つて三井鉱山が高根川東支流中の沢で探査したものはこれに属する。

(ロ) 上部夾炭層 本層は中部砂岩層に整合に重なり、全厚約 150 m で主として暗灰色頁岩と帯緑淡青色細粒縞状砂岩との互層よりなり、時に灰白色塊状粗粒砂岩を挟む。調査区域内の本層中には炭層が 7~8 層発達するが、炭質頁岩が多く且つ膨縮が甚だしいから稼行可能と思われる炭層はその中 0.5~+1.0 m の炭丈を有するもの 2~3 層に過ぎない。現在芦別町南側増田沢で北日本鉱業稼行中の炭層はこれに属すると考えられる。

3. 炭 層

a) 高根夾炭層 最も有望な炭層は高根川兩岸数百 m の範囲に密集しているが、これらは北及び南方に向つて漸次縮減或は尖滅するものと認められる。

次に主として高根炭鉱稼行区域(南部区域)の炭層に就いてその特質、消長を示せば次表の如くである。

各層の上下盤及び挟みに就いては、附図 3 炭柱図に記してあるので省略するが、特に挟みは上下盤と同様な頁岩、砂質頁岩或は砂岩等であつて、凝灰質その他異質載のものを挟む事はない。特に強調する必要のある事は炭層の分岐膨縮炭質の変化及び走向方向特に南方延長部の尖滅等で高根本流北岸の 6 番層と 6 番層沢の該炭層とは著しく異なる炭柱を示す。この間高根川を挟み僅に 70 m の距離に過ぎないが如何に激しく炭質が変化するかを示す一例である。

b) 熊の沢夾炭層(附図 4 参照) 本層に属する炭層はその全部が露頭部に就いて観察されたもののみであるか

炭層名	平均層厚 (m)	走向延長		炭丈/ 山丈	稼 行 状 態 (昭和 22 年 11 月現在)
		確 定	推 定		
下位より					
8 番層	1.20	950	100+	0.44	南部区域の高根川南岸に新坑口(水平坑道)をつけ掘進中 " (隣接雄別炭礦地区は使用権設定)
7 "	1.57	700	600+	0.68	
6 "	4.36	1100	300+	0.32	
5 "	1.30	300	300+	0.86	
4 "	2.05	1000	500	0.77	高根川北岸では二片(地並以下 -30m)まで採炭 " 南岸では新坑掘開中
3 "	1.00	500	400	0.31	" 北岸では二片(地並以下 -30m)まで採炭 " 南岸では数層に分岐しその一つを現在採掘中
2 "	0.71	400	800	1.00	現在稼行層にはなつていないが、3 番層の掘進坑道内に断層に依り 2 番層が現われた爲目下同処に於いて掘進中
1 "	3.10				

炭層名	採取場処	色	光沢	韌度	風化の難易	着火及燃焼の難易	焔の長短	組織	備考
1番層	高根炭鑛0片坑内	漆黒	稍々強	強		容易	中	均一塊状の筋なし炭	
2 "	" "	黒	良					大部分は筋引き炭であるが下半部は筋なしの良好な輝炭縞状炭を含む	
"	" 1片坑内	黒~漆黒	"				中~長	均一塊状の筋引き炭一部眼紋炭をなす	
3 "	" "	"	強	強			"	"	
4 "	" "	漆黒	"	"			"	"	
5 "	六号沢堀割	暗黒	良	"	難			大部分は良好な筋引き炭であるが下盤近く若干縞状をなす筋なし輝炭部を主とするが下半分は縞状炭となる	特に本層の炭質の変化は甚しい様である
6 "	" "	黒~漆黒	稍々強	"	"			"	
"	八号沢	"	強	"	"			"	
7 "	六号沢	"	"	比較的弱	"			眼紋炭を含む良好均一な輝炭である	米粒大の琥珀を含む層面と直角な細龜裂が多い
8 "	" "	黒	良					均一塊状の筋引き炭	
"	四号沢	"	"					炭質頁岩暗炭の互層をなす縞状炭	

ら、その炭層性状が明瞭でない点が多いが、概して高根夾炭層のものと同差ないものと認められる。上部夾炭層には上位より1, 2, 3, 4, 5番層の5層、下部夾炭層には6, 7, 8, 9番層の4層あるが各層間の距離は平均して85m、大部分のものが未採掘のままである。主要露頭における炭柱は附図4に示す通りである。

附記 芦別夾炭層については、本報告にゆづる事とする。

4. 高根夾炭層の炭の外観及び炭質

高根鉦業所資料に依れば従来の工業分析の結果は次の如くである。

炭層名	採集位置	水分 (%)	灰分 (%)	揮発分 (%)	固定炭素 (%)	発熱量 (Cal)
6番層	六番層の沢の6番層下半部	40.0	15.0	35.0	46.0	6600

5. 炭量

a) 高根炭鑛鑛区内に於ける理論推定炭量 (便宜上該炭鑛所が雄別炭鑛鉄道株式会社から使用権設定により借用中の区域を含む)

高 根 夾 炭 層 単 位 産

炭層名	1,2番層	3番層	4番層	5番層	6番層	7番層	8番層	計
地並以上	111,095 ^t	12,684 ^t	85,000 ^t	13,817 ^t	126,317 ^t	129,077 ^t	106,428 ^t	584,418 ^t
地並以下 5.0m迄	836,106	80,410	728,812	68,048	934,012	941,216	1,083,772	4,672,376
計	947,201	93,092	813,812	81,865	1,060,329	1,070,293	1,190,200	5,256,794

熊 の 沢 夾 炭 層

炭層名	4番層	6番層	7番層	8番層	9番層	計
地並以上	12,912 ^t	3,313 ^t	62,511 ^t	103,693 ^t	76,619 ^t	259,048 ^t
地並以下 500m迄	51,308	20,623	84,587	438,181	74,548	669,247
計	64,220	23,936	147,093	541,874	151,167	928,295

合計 約 620 万 産

b) 調査全区域の理論推定炭量 (高根鉱業所鉱区炭量をも含む)

高 根 夾 炭 層

炭層名	1,2番層	3番層	4番層	5番層	6番層	7番層	8番層	計
地並以上	449,806 ^t	142,900 ^t	278,615 ^t	36,983 ^t	526,324 ^t	172,836 ^t	191,706 ^t	1,799,220 ^t
地並以下 500m迄	5,174,927	264,064	2,270,621	148,797	2,848,653	1,460,769	1,814,363	13,982,196
計	5,624,733	406,964	2,549,238	185,780	3,374,977	1,633,655	2,006,069	15,781,416

熊 の 沢 夾 炭 層

炭層名	1番層	2番層	3番層	4番層	5番層	6番層	7番層	8番層	9番層	計
地並以上	30,113 ^t	67,042 ^t	40,500 ^t	35,475 ^t	63,461 ^t	655,368 ^t	35,339 ^t	388,185 ^t	63,202 ^t	1,378,685 ^t
地並以下 500m迄	220,555	1,165,041	4,561,883	825,147	739,485	3,186,465	611,472	956,035	196,244	12,462,327
計	250,668	1,232,083	4,602,383	860,622	802,946	3,841,833	646,811	1,344,210	259,446	13,841,012

合 計 約 3,000 万 吨

6. 稼行状況

調査地域内には採掘登録鉱区 4, 試掘登録鉱区 4 があるが、現在稼行中のものは高根炭鉱だけである。高根炭鉱(高根第一炭鉱株式会社高根鉱業所)に於ける稼行炭層の状況に就いては既述してあるので省略する。又開発程度・出炭・販路等に関しては炭鉱各説の項で記述する。

7. 結 論

高根川流域に賦存する炭層に就いては、従来該炭層は羊齒砂岩層に属する低品位の殆んど全部が炭質頁岩とも云うべき粗悪のもので、稼行に堪えないものとして取扱われた事もあるが、今回の調査では高根夾炭層は高根川南岸附近に於いて比較的有望な炭層を数多く採有し、所謂羊齒砂岩層の異相と考えられる。但し炭層は大部分走向延長方向に漸次縮減し結局局部的な発達をなしたものと観察された。埋藏炭量は高根夾炭層の稼行可能炭層に就いて、理論推定炭量 1,578 万 t、熊の沢夾炭層の 9 炭層に就いて 1,387 万 t、計約 3,000 万 t (-500 m 迄)である。又下部幌介層最上部即ち、高根夾炭層への漸移部分附近には品質優良な瀝青炭に代表される 4~5 層の炭層が介在し高根夾炭層中の炭層より連続性を有するが、何れも層厚 50 cm 内外のものである。熊の沢夾炭層に含まれる炭層の状況は今回の調査ではなお詳かでない点があるが、炭質は高根夾炭層のものと概ね同質であり、走向方向への連続性は、むしろ安定しているものと思われる。芦別夾炭層は、既述の如く主要夾炭部分は上部、下部の二層に分たれるが上部夾炭層のものは、下部夾炭層

のものより品質が劣るものと観察される。これらは歌村断層の東側に分布し調査区域にはその北西端の一部が賦存するだけで主要分布範囲は調査区域の東側即ち芦別市街を中心とする広大な区域である。又歌村断層の西側では主要炭層は著しく北へ轉位し区域外、空知川の北岸に分布しているらしい。

8. 意 見

調査区域内に於ける各地層は何れも石炭を含み略々南北に帯状に分布している。従つてこれを横切る如き東西性の河川に沿うて今後更に綿密に精査を行い、炭層を発掘して炭状を把握する必要があるが現在迄の資料によれば概して局部的発達を遂げた炭層が多いものと考えられる。特に歌村断層の東側に賦存する芦別夾炭層は幾多の逆断層に依つて重覆露出しているので、小規模稼行の場合でも充分精査を行つて企業価値の判定を行うべきである。

9. 炭 礦 各 説

a) 鑛 區

登録番号	位 置	面 積	鉱 業 権 者	備 考
採登 316	空知郡芦別町 御料地内	290,100	坪札幌市北 6 條 西 17 丁目 高根炭礦株式会社	高根炭礦 稼行中

b) 沿革 古い事は不明であるが嘗て三菱鉱業株式会社所有であつたものが、昭和の初め頃須貝富藏氏に移り、更に昭和 13 年福岡貞雄氏の手に入り高根炭礦株式会社の設立と共に同社の経営に移つた。爾来小規模に稼

行されていたが昭和18年架空索道の完成を見、昭和21年5月から恒常的採炭に着手し今日に到った。

c) 位置交通 当炭鉱は北海道空知郡芦別町及び赤平町御料地内に在り、根室本線芦別駅の西方直距約5km、芦別—平岸両駅間で空知川に注ぐ高根川川口より上流約4kmに位している。芦別市街地から国道により高根川口に至り更に高根川沿いに新設道路により山元まで達するにはトラックで約40分を要する。物資の輸送は山元—芦別駅間約4.5kmの索道に依つているが、精炭の輸送は主としてトラックにより平岸駅に向つてなされる。

d) 稼行状況 (昭和22年)調査当時の「坑道」主要坑道は第1斜坑で傾斜18°約90m延びている。片盤坑道は3番層1片170m、同0片は165m、4番層1片は335m、同0片は370mとなつている。

「採炭」炭層が急傾斜なのでシュリンケージ法により手掘採炭している。現在は主に4番層を採炭しており、その切羽実収率は約80%、塊粉の割合は6:4位である。

「運搬」切羽—(手押運搬)→(蒸汽捲)→炭舎—

550.8 : 553.94 (522.3) : 622.19

佐賀炭田三間坂地区調査報告

須見 貫 二* 逆瀬川 清 丸** 古川 俊 太 郎***

Résumé

On the Geology of Mimasaka District in Saga Coal Field, Northern Kyushū.

by

K. Sugai, K. Sakasegawa & S. Furukawa

The formation in this district belongs to Palaeogene Tertiary, which is composed of the formation from the Komanaki bed (middle part of the Ashibetsu formation) to the Ainoura bed (the lowest part of the Sasebo formation). It is clearly erroneous that this formation has been correlated to the Kishima bed by some geologists. Though the dark grey sandy shale at Miyano & Ono resembles to the Kishima bed, it must be correlated to the Yunokibaru bed or the Hatatsu sandy shale. Consequently the coal seams in question will be reached at the depth of 700-

* 北海道支所燃料課長 ** 燃料部 *** 福岡支所
地質月報第1巻 第5號

(索道)→索道ステーション炭舎

「排水通気照明」自然通気で排水には5馬力ポンプ2台を使用している。照明は電気安全燈を使用している。

「出炭状況」

月 別	昭22, 4	5	6	7	8	9
実 績	2,022 ^t	2,077 ^t	2,002 ^t	2,100 ^t	2,100 ^t	2,195 ^t

e) 意見 当炭鉱は着々その内容を充実し、漸次生産を向上させているが、鉱区の面積は甚だ狭小であつて、その周囲は大手筋の未稼行鉱区に囲まれている。これら囲繞鉱区の未稼行炭層は概ね小規模であつて新設備を以つて開発に着手する程の企業価値を有するものとは認められないが、当炭礦の現有設備を利用して小規模開発を企てる事には妥当性があると思われるので調査地域全般の増産開発の問題は高根炭鉱を中心として休眠鉱区を小規模乍ら逐次開発してゆく事を基礎として解決すべきであらう。(昭和22年8~10月調査)

600 m from the earth surface by the two core-drills, i. e. at Kijima Colliery & Saga Colliery. So the two core-drills are not significant for an immediate exploitation, but they are valuable only for scientific interest.

1. 要 旨

本調査は石炭廳からの委嘱調査で、その主要目的は次の二つである。

- (1) 佐賀縣杵島郡住吉村宮野及び大野附近を中心に、かなり広く分布している砂質頁岩が、最近杵島層ではあるまいかと、問題になつてきているので、この問題を決定すること。
- (2) もしも杵島層である場合には、垂直深度300m内外に芳ノ谷累層中の所謂杵島本層が伏在することとなり、稼行の対象となり得るので、試錐を施行する必要が生じてくる。よつてその試錐位置を選定すること。

調査の結果、上記宮野及び大野附近の砂質頁岩層(住吉砂質頁岩層)は実は柚木原層(畑津頁岩層)に対比されるべきもので、杵島層ではない。従つて緊急開発を目的とする試錐を施行することは、現在のところ不必要であ